



「角常 世二云万歳楽」(多賀社文庫57)

芸能ノオト⑥

## 正月の賑わい ～万歳と門開き～

正月には、万民が同じように年（歳）を取り、また皆が同じように暦（時）を更新して新たな歩みを始めます。そのこと自体が、限りなくめでたいこととされてきました。正月を祝うことは、祝祭の時間と空間を共同で現出し、共有することによって、皆が等しく厄災を逃れ、幸せを希求しようとする集団的な装置ともいえましよう。

そのお正月を迎えるにあたって、おめでたいでたちで家々を回り、祝い言を述べて米や餅をもらい歩く人々がありました。記録に残るそれらの人々について紹介します。

### 【節季候（せきぞろ）】

12月1日は「川渡り（かわたり）」といい、餅を食べるとされた日でした。この日には餅を売り歩く人々の他に、「節季候」と呼ばれた人々が笠の上にウラジロ（もろ葉。正月飾りにも使われるシダ）を飾ったいでたちで家々の軒先を回り、煤払いの故事やさまざまな祝言を唱えて米・麦・餅などを貰い歩きました。三田尻町では、「節季候、金そろ、大判小判や壱歩に丁銀、豆板あなたへそろりやそろつ」という祝詞がのこされています。（「注進案」）

### 【門開き（かどびらき）】

年が明けると、狩衣（かりぎぬ）や素袍（すおう）・袴のようなものを着て大小を差し、手に松の緑を持ち、歌とも経とも祓詞とも区別のつかない節回しで面白く祝言（万歳）を唱え、家々を廻り歩く人々がありました。これを「門開き」と呼び、家々からは祝餅や米、酒などの祝儀を与えました。

彼らが太鼓を打ちながら万歳をうたい歩く順番は、旧来の家柄で一番太鼓、二番太鼓というふうに決まっていた。三味線をつま弾きながら時々の流行歌や浄瑠璃等をかたるものもあったようです。

12月の「節季候」と正月の「門開き」は、おおむね同じ人々の業だったようです。

### 【万歳（まんざい）】

上の「門開き」も万歳と呼ばれることがありましたが、山口には彼らとは別の由緒と格式をもつ、「カクジョウ」と呼ばれる万歳集団がありました。彼らは普段は百姓として田畑の耕作等に従事していましたが、年が明けると、古くは山口周辺、江戸時代には萩城下にも出て万歳を歌い踊りました。



「覚定烏帽子」  
（一般郷土史料 1704）

山口の覚定が被っていた鶏烏帽子。左右に開き、頭に被ります。下の写真は幕末の画家森寛斎の描いた覚定です。



「カクジョウ」には記録上は角常・覚定・鶴尉・鶴聲・楽匠など様々な字があてられましたが、ここでは「覚定」に統一します。以下、近藤清石の『霜堤雑草』巻15（山口県立山口図書館蔵）の記載を参考に、かれらの正月の様子をたどってみましょう。便宜上、番号を振ります。

- 1) 元日、早天に山口町鰐石の旧家、岩本新左衛門という者の家に至り、「まず堀内の新左衛門殿を祝いましょう」と言って岩本家を祝い、その後他家を祝う。
- 2) 萩に出る。お城に出るのは11日と決まっており、城の台所で祝詞を申し、酒を賜わる。これは覚定の本家筋の者の作法で、その後同行の者たちと城下の土・庶の家を廻る。それぞれが檀家を持っている。
- 3) 檀家にいたると案内を乞い、「山口の覚定が例年の通り参りました」と言う。袴を着、小刀をさしたいでたちで、衣装や引出物を持つ従者を伴う。
- 4) 「通れ」と言えば、指定する席に従者と共につき、水干（すいかん）のような紺染で背に三四ばかり桐の紋がついたのを着て、右手に扇を持ち、左手に鶏烏帽子を捧げ、神棚の前に至る。
- 5) 鶏烏帽子は扁平で左右に開く。鶏が宝珠を啜えた形で、左右に日月及び宝物等を金銀五彩で描く。すこぶる美麗で、問田の覚定は雄鶏、吉田の覚定は雌鶏という。鶏烏帽子をかぶり、しばらく祈念した後、立ったり座ったりしながら祝詞を節おもしろく唱う。
- 6) 婦女子には、戯れ言を交えて笑わせる。家によっては正月のことゆえ、宿泊させて、あるだけの祝辞を唱えさせる。祝詞は12編あって、これを「覚定の12段」

という。従者は後の方にいて、時々「まんざいろう」と合いの手を入れる。

- 7) 終ってから、家によって厚薄はあるが、自分（近藤清石）の家では白米を1升、径3寸ばかりの餅を一重ねと錢24文を与えていた。

近藤清石は天保4年（1833）から大正5年（1916）まで生きた人ですが、萩城での記述などから、おおむね幕末ころの風景が描かれていると考えていいでしょう。彼らは武士の家の神棚（歳徳神の恵方棚でしょう）の前まで上がりこみ、場合によっては宿泊までしています。萩城では祝いの酒を賜り、鶏烏帽子が破損したときは、家老の益田から旧格をもって調え替えがなされたとも伝えています。

彼らはまた、防府天満宮の祭礼にも関与していました。大内氏が祖とする琳聖太子と共に百済から渡ってきた陰陽師の子孫であり、元祖浅井（朝日）将監は三田尻の車塚に住居していたとの由緒をもっていました。

最初に掲げた写真は覚定＝角常の万歳の祝詞を記録したのですが、下に、その冒頭部分を紹介します。長い間口承で伝えられたため、意味のとれない部分が相当あります。この冒頭部分は冠（烏帽子）を着用せず従者と二人で声をそろえて歌い、その後冠を着用して歌う部分と脱いで歌う部分があったようです。

### かくぢやう

ありなん上、面白こんごう候ひ、けふハ、東わくんさい天王、南わくんたり（軍荼利）夜叉、西八大威徳多聞天王、北はこんごう（金剛）夜叉、辰巳ハこもく（広目）天王、未申ハ宣上（増長）天王、戌亥ハぢごく（持国）天王、天にハ日月、下モにわけんろう（堅牢）地神迄も、調度守り、しゆんぎやうしよしめたいらげ（平らげ）たツも（給う）、実（げに）誠に尊ふ候ひ、けふは、歳の始の年男が、りしにこんで、玉の冠をかうべ（頭）にめ（召）して、ばあくへんが太刀をは（佩）いて、ゆづり葉を口にくわえ、五葉の松を手にて、南殿ゑつ（突）きた（立）て、へいじが門を推開き、おゝ汐くんで候ひければ、はりや此所わよい所や、こうしや（巧者カ）の所や、福者の留り、末代末世なん（難）もなき所にて、聖徳太子の名而ほんな車にめ（召）して、ちよふどせん（朝鮮カ）より我朝へと（飛）んで来らせ給ひければ、四社五社六社の車を持って、わやくまく、むりんどらハ、りんおんば、金剛利鬼士（力士）が、調度引キやたいらげ（平らげ）たんもんもう（給う）、実（げに）や誠にたと（尊）ふ候ひければ、さんしうりふの、東にわ、とびの河がなが（流）れて、其水上をたつ（訪）ぬれば、うき木にの（乗）つたる、ちよふぢやくぼうしが、雲へ登れ、坂へ登れ、かすみのはし（橋）を渡したり、  
……

「角常 世に云万歳楽」（多賀社文庫57）の冒頭部分。この冒頭部分の後、上の6)にみえる「覚定の12段」等が始まります。

当館には、このほか覚定の祝詞として「御来暦山口格定」（県史編纂所史料105）があります。冒頭部分は大同小異ですが、その後の部分はかなり異なっています。